



## シリーズ「きょうだいの思い」⑦

## 『中学校の一年間』

2つ違いの弟とは、中学校生活を一年間共に過ごした。当時は各学年10クラスもある時代だった。弟の学年は、障害を持つ同級生が弟の他にもう一人いた。

私の学年には、旧・市立養護学校からの交流生も含めて7人の障害を持つ同級生がいた。7人もいるので、私は三年間、必ず障害を持つ誰かと同じクラスになった。それが嫌ではなかった、むしろ嬉しかった。中学時代の私は、反抗期まったただ中で、自分の思うがままにやりたい放題を謳歌していた。真面目に勉強することもなく、学校にはクラブ活動と遊びに行くような感覚だった。先生には、怒られることの方が多い学校生活だった。

家庭科の時間で、相変わらず私語が多く、授業すら聞いてない私に、先生が一喝した。「コラッ〇〇！静かにしなさい！〇〇、あんたは弟の分まで頑張らなあかんのどちがうか？そやのに、何をしてんねん！」

家庭科のため、教室は2クラス的女子一色だったが、その瞬間にシーンと静まり返った空気が流れた。いつもなら、先生に注意されたら反抗して口答えする私も、何も言えなかった。

「なんで、弟のことが関係あるねん！他の子に注意するときは、きょうだいのことなんか言われへんのに、私にはなんで弟のことを言うねん、腹立つ！」と、やり場のない苛立ちだけが残った。親友に、さんざん愚痴を吐いた。今思えば、当時の私を見るに見兼ねて先生が発した怒りの言葉なのか、と思う。「自閉症の息子のことで手一杯なのに」と、もしかしたら先生は、母親に近い目線から発した言葉かもしれない(笑)あれこれと考えてきた。

中学を卒業以来、この家庭科の先生とお会いしたことはない。この一件の『答え合わせ』は出来ていない。自分でするものだと思っている。でも今の私なら、先生の怒りの言葉に、すべてではないが少し納得できる。

私は健康に生まれ、弟は障害を持って生まれてきた。これが逆だったかもしれないと思えるようになったのは、もう随分と年齢を重ねてからだった。そう思えるようになった時、先生のあの怒りの言葉が、自然と後ろを付いてきた。それからは、この思い出は『苦い思い出』ではなくなった。

あの時はわからなかったけど、先生の言葉には深いものがあったのだと、感謝している。

前穂通信  
まえほつうしん

発行日

2011年8月1日

発行元

自立センター前穂  
〒569-1022  
高槻市日吉台  
1番町21-18  
072-689-8600

## 皆様のお声から

頂戴したお声を2つ紹介させていただきます。

一つ目は、ある寡黙な方のご両親から「ショートの中では、声もかけられず放っておかれているのではと心配です。積極的に声をかけてくれる事で、本人の意識もかわり、徐々にあっても成長すると信じています。」

二つ目は、「ショートではただ居るだけでしょうから、本人のためになるようなことをして欲しい。それに前穂では陶芸をしていると聞いているが、うちは誘われた覚えがない。陶芸は以前経験したことがあり、させればできるのに、何故、誘ってもらえないのか？」というものです。

お聞きして、我が子の幸せを願われるお気持ちに胸が熱くも苦しくもなりました。「お一人お一人に添いたい」という支援職としての切なる願いもあります。また、「必ずしもご本人が望んで来ておられる訳ではない。もしかしたら、ご家族のために我慢しておられる」とも思っております。それゆえに「お一人お一人にとって楽しい場所にするには？」と考えて、日々のお付き合いをさせて頂いております。実は、前穂で取り組んでいるプログラムには、そうした願いも込めております。

しかし、ショートの最優先使命は「生存と安全の保障」だと認識しています。ですから、2010年3月号の「陶芸プログラムからの報告」の下段にも記述いたしましたように、プログラムをすべてのゲストにご案内ができていない事情もございます。どうかご理解いただきたいところです。